ベイルート(レバノン) ダマスカス(シリア) ダラ(シリア) ラムザ(ヨルダン) イルビット(ヨルダン) アンマン(ヨルダン)という2つの国境を越える怒涛の移動を、たった1日でしてきてやけに疲れた。

自転車がなければダマスカスからアンマン行き の直行バスに乗れたのだが、まだ完全に壊れて いないばっかりに、だいぶ刻んだ行程になって しまったのだった。

しかし、ここまで頑張る理由は、一度自転車を 持って来てしまえば、街乗りがとても楽しい事 である。そして徒歩よりも圧倒的に活動範囲が 広がるので旅の醍醐味が増す。

こうなったらアンマンで徹底的にチャリチャリ するぞ、と思ったが、このアンマン、坂がきつ い街なのであった。結局一度も乗ってない。



小型のタクシーに無理矢理自転車を乗せたところ。自分で走らなければただの大型荷物である。

## ヨルダンの概要。

とほほ.....。

1.面積 : 8.9 万 km2 (日本の約1/4)

2.人口 : 533万人(02年末)3.首都 : アンマン(Amman)

4.人種 : パレスチナ人(約7割) ベドウィン系ヨルダン人

5.言語 : アラビア語 (英語も通用)

6.宗教 : イスラム教 93%、キリスト教等 7%

7.略史 : 7 世紀イスラム諸王朝の支配

16世紀からはオスマントルコの支配下に入る。

1919 年英の委任統治領となる

1923年トランス・ヨルダン王国建国

1946年トランス・ヨルダン王国として独立

1950年ヨルダン・ハシェミット王国と改称

## ヨルダンという国

ああっ、この国って好きだな、と感じる理由は人それぞれだったりするが、私の場合には、

- 1.その国の人間が素敵なこと
- 2.飯が美味いこと
- 3.ビールとワインが安くて美味いこと
- 4.女性がきれい

に集約される様である。因みに順不同である。





## <この国でイチバンの男>

世界の名物宿の1つとして、このアンマンにある【クリフホテル】を挙げる日本人が多い。

何故ならこのホテルの従業員のサーメルという男(32 才)が、抜群にいい奴なのである。しかも日本大好き青年で、もともと親切な奴なのだがお客が日本人となると、さらに親切になる。

ヨルダン観光ネタはもちろんのこと、旅のルート相談や値段交渉、お土産屋への案内、飯屋の紹介や細々とした厄介ごとまで一手に引き受けてくれる。

こちらが礼を言う前に、片言の日本語で『ど、いたしまして』と答えるひょーきんな奴である。 こんな人がその国に一人いるだけで、その国のファンが誕生したりするのだった。

#### 彼はパレスチナ人である。

中東戦争の度に、ヨルダンには数万人から数十万人のパレスチナ難民が増えることになった。今ではヨルダンの人口の 7 割がパレスチナ人になっている。もしかすると彼もパレスチナ難民の一人なのかもしれない。

彼はこのホテルのオーナーに思いっきりいいように使われている。オーナーはデスクで昼寝した りする様な奴だが、彼はほとんど 24 時間勤務だったりする。寝起きはロビーのソファーだ。旅 行者は真夜中でも到着するとベッドが欲しくなる人種なので、彼の様な存在は有り難い。

この宿においてある【情報ノート】には、"サーメルは今の人使いの荒いオーナーを嫌っていて、もしかすると違うホテルに移るかもしれない、と言っています。だからもし移っていたら、以後の旅人の皆さんは、是非そのホテルに移ってあげてください"という様な記載が幾つも書いてあった。

サーメル、なかなか人気者である。

私も洋服の繕いをしてくれる店を紹介してもらったり、安い酒屋に付いて来てもらったり、お土 産屋さんに交渉してもらったりして、大助かりであった。

一緒のタクシーに乗った時の事、私の用事だから当然私が払うのだが、彼は自分のポケットから 出そうとする。それを制してさらに『値段を交渉してお釣は君が取れ』とわざと多めに渡してや ると、彼は躊躇なく全額をドライバーに渡してしまった。

そんな人のいい奴なのである。

### <食べ物>

このサーメルが勧めるのがイラク食堂。

イラク料理を安く食べられるらしい。

従業員は全員イラク人。私が行くと、サッカーの自慢話を始めて、なかなかご飯を出してくれない。いったん話に火が付いちゃうとこうなんだから…。適当に注文して出てきた料理は3品。スープは普通。トマトベースの野菜の煮込みも普通。ただピラフにはピスタチオが入っていて、意外にこれが激ウマ。これで0.9JD(140円)。なかなかやるねイラク人。



アンマンにあるイラク食堂のご飯。ピスタチオの入ったご飯に、トマトベースの煮物、スープで 0.9 ヨルダンディナール(140 円)

### <ビールとワイン>

ビールを買いに行く。

宿から 1 分という近さは嬉しい。ダマスカスでは本当に苦労したけど、アンマンはさすがアメリカよりのせいかイスラム色が少しシリアより薄い。ビールの調達は全く問題ない。

しかし、ビール 1 本 630 ml が 1.5 ヨルダンディナール(233 円)もするのだった。物価が高いと言われるレバノンの倍だ。

ヨルダン産のワインもある。ただ 6.5 ヨルダンディナール(1008 円)ととても高い。味はなかなかいけている。でも値段ほどではない。

### <女性>

トルコには、"真っ黒な衣装の女性たち"はあまりいなかったが、シリアでは結構見かけた。

またレバノンではほとんどいなかった。ヨルダンも少ない方だと思う。

むしろ、ヨルダンの女性はスカーフの巻き方だとか、洋服の着こなしが結構、サマになっていてとてもオシャレな気がする。

香水ショップに立ち寄ってみる。小ビンに入れて、2JD(310円)だそうだ。色とりどりできれい。

さらにきれいだったのが、ここの店員さん。 写真を撮られたがらない女性は相変わらず多い



アラブの国々では香水屋さんが繁盛している。特にアンマンの香水屋さんは華やかだった。彼女もきれいだし。

のだが、彼女はポーズまでとってくれる。スカーフもとって欲しかったな。

#### 死海へ行こう

アンマンから死海へはそれほど遠くなく、日帰りが可能。

意外だったのは、【死海】って、すごい観光スポットかと思ったら、現地ではそれほどでもなく、アンマンから死海への直行バスはほとんどない、という事が分かった(イスラエル側はかなり開発が進んでいるらしい)。

サーメルにアラビア語で死海への行き方を紙に書いてもらい、教えてもらったバス停まで行く。やはり死海行き直行バスはなく、途中のサウス・シューナという場所へ行くやつに乗った。途中、かなり下っているのがわかる。死海の海抜は現在マイナス 404 メートルだそうだ。約2万年前に起きた地殻変動により、地中海の一部が切り離されて出来た巨大な湖である。元は海だった為、海水が砂漠の強烈な日差しで水分が蒸発。海抜が下がると共に、塩分が濃縮されたらしい。

40 分ほどでサウス・シューナに到着。ここで死海行きのバスに乗り換える。

すぐに死海が見えた。

そしてその向こう側の土地も。イスラエルであ る。何だかものすごく近い。イスラエル側は高 い山が連なっているようだ。急激に水分が蒸発 しているせいか霞んでいてはっきりとは見えな 61

バスは死海どまりと思ったら、死海を経由して どこかへ行くみたいだ。途中で降ろされた。 ここからはヒッチをする。

死海は右手に見えている。そのまま海岸に行け ば浮遊体験は出来るし、ここだとシャワー施設



遠くに霞んで見えるのがイスラエル。死海だと簡単に泳いでいけ

なんかもあるらしいのだが、サーメルがお勧めするスポットは、さらに先にあるのだった。

手を挙げるとラッキーなことに一発で停まってくれた。何と高級ベンツ。サーメルに書いた紙を 見せると、『途中までしか行かないけどいいか』といわれ、即座に OK した。何と英語が流暢だっ たのである。でも確かに直ぐに降りることに。

で次に来たのはやはりベンツ。でも今度はメルセデスベンツ製の大型トレーラー。

トレーラーに乗るのなんて初めてでウキウキ。さすがに目線が高い。

### 死海温泉

サーメルの教えてもらった場所は、観光客にはあまり知られていない。ガイドブックにも載って いない。ヒッチしないと行けないような場所だからだろう。

実はここには温泉があるのであった。

トレーラーに温泉地で下ろしてもらう。

道路から山側に1軒お店があり、その横に温泉。 川のように流れている。そのお湯は道路の下を くぐって死海に流れ込んでいるのだった。

道路から死海は少し崖の下にある。

崖の下には温泉が石でせき止められていて、深 さ 20 センチほど浴槽になっている。意外なこ とに誰もいない。

早速海水パンツ姿になり温泉へ。目の前の死海 よりも先に温泉に入る私。なかなか出来ないこ とである。

深さ 20 センチでは今一つなので、浴槽の砂利



事の温泉。 硫黄の匂いが少しする。 温度は 42 度くらいでちょう どいい。死海と違って塩辛くない。

を外へ取り除くことに。自分の体の分だけ 40 センチにした。20 分も掛かった。なかなか出来ないことである。

温泉は、無色透明。42度。微妙に硫黄の臭いがしないでもないという程度。

目の前が海なので実に見晴らしが良い。私の中の世界温泉のベスト 10 に入りそうである。

# 死海で浮く

さて、死海本番。

片足を入れる。何ともない。両足で立つ。何と もない。

ところが海面に寝た瞬間、ぷかっと浮いた。お おっ、こりゃ面白い。

さすがに海の塩分濃度の7倍というだけあるぞ(28パーセント)。

なめてみると、舌がビリビリくる。何か塩をつまんで舐めたときよりも強烈な気がする。

巷にある死海の写真では、大抵新聞を読んでいるか、文庫を読んでいるシーンが多い。



死海では新聞が読めるどころか、一人で記念撮影が出来てしま うのだった。 海岸は少し白くなっている。塩である。

確かにこれなら楽勝でできる。

それどころか、カメラを持っていって浮きながら、一人記念撮影までしてしまった。 この日はかなり風があって波もあり、かなり沖まで行ったので何時の間にか流されて、片手で戻 るのがたいへんだった。

ただこの死海、しばらく浸かっていると、体のあちこちがしみてくるのである。小さな傷がいっぱいあるせいだろう。

長く死海に浸かっていると、あった傷口は真っ赤になり、ところどころ腫れてくるのであった。 さらに男性の場合、しみてくるのである。耐えられなくないが、ちょっと気になる(実は、前派と 後派がいるらしい。後派はお尻の穴が痛くなってくる。私は前派)。 恐るべし死海。

普通、長く水に浸かっていると、手足がふやける。しかし死海の場合には全くふやけない事に気づいた。温泉では直ぐにふやけ、だんだんと白くなるが、死海ではむしろ皮膚の水分を取られているような感じである。次第に体の水分がどんどんと抜けていきそう。 恐るべし死海。

この日は風が強く、波があった。

波が近くの岩に当たり、波しぶきが目に入ってたいへんな事に。何もしないと3分くらい痛い。 そんな時は、すかさず温泉に頭から入る。

このビーチ、誰もない辺ぴなところだが、温泉があるからかなりよい場所だと思う。中にはシャ

ワーがない、ただの海岸のとこももあるので目に入ったらたいへんだろうな。しかし目に入ると本当に痛い。

恐るべし死海。

海水パンツじゃなんだから、誰もいないことをいいことに、全裸になってみる。

2 0 分ほどプカプカ楽しんで温泉。またプカプカ 温泉 プカプカ 温泉を繰り返していたら何時の間にか3時間も経ってしまった。

たまにヨルダン人がやってきて 15 分くらいいるが、直ぐに帰ってしまう(家族連れは私の姿を見るだけで帰ってしまう(ゴメン、直ぐに気が付かなかったよ))。

これだけ徹底入っているのは私だけ。だからほとんど独占状態である。



死海で戯れるヨルダン人二人。プカプカ浮いている。この日は波が強く、泡沫が目に入ることも。 痛いんだな、これが。

海で一人ってのはけっこうコワイが、さすがにここではおぼれることはない。

#### 死海深層水を汲む。

深層といっても手の届く範囲の深いところである。ゴーグル無しに潜ったらえらいこっちゃ(たぶんもぐれないけど)。

ペットボトルを 2 本持って来ていたのだった。その 1 本に死海深層水を入れる。1 本は未開封の水。両手に持って比較すると死海水の方がずっしり重い。

計算すると、死海の水のボトルは300グラムぐらい重たいはずである。その通りだった。

# ヨルダンのヒッチハイク

行きのヒッチハイクはラッキーだったことを思い知った。帰りのヒッチハイクが実にたいへんだったのだ。

ここへ来る以前、出会った日本人女性、韓国人女性曰く、

『ヨルダンのヒッチは楽勝だね、ヨルダン人て素敵』。

という事を口々に言っていた。

さらには『停まってくれた車の後ろに、さらに次の車が待っていた』んだそうだ。

私の場合、行きは一発で停まってくれたが、帰りは全然。

炎天下、歩きながら30分もヒッチすることに。

行きしな、道端の看板を見ると、日本の国際協力銀行が何かに金を出してると表示されていた。 多分、この道路の建設費を日本が援助しているのだろう。

『ちょっとちょっと、この道路、日本の税金、もとは私の酒税。一台くらい停まってくれてもいいんじゃない』と思うのだが、一向に停まってくれない。時に正午過ぎ、もう秋と言えどもヨルダンの砂漠の中のアスファルトはとても暑くて参った。

ようやく一台停まってくれて、バス停まで送ってくれる事に。

バスに一緒に乗り合わせたヨルダンの人が、『死海は年間 50 センチずつ低くなっている。何もしないとそのうち枯れるので対策が検討されている』という様な事を言っていた。

それって、さらに濃くなるって事?さらに浮いちゃうの?そりゃまた来なきゃ。

この乗合バスは、訳の分からないアンマンのあるターミナルで下ろしてくれた。途方に暮れたが、 ここに市場があったので入ってみることに。

いろんな食材を買った。トウモロコシ、そら豆の小さいやつ、キューリ、カブ、オクラ、玉ねぎ、 人参。全部少しずつだが、1.3 ディナール(202 円)。安いもんだ。

オクラは、店によってはキロ単位でしか売ってくれない。ある店で、これだけ頂戴?とお願いしたが、若い兄ちゃんにムゲに断られた。他の店に行こうとしたら、その兄ちゃんが呼び止め手招きしている。おおっ、少しでも売ってくれるか、と思ったら、座ったまま、『時計を見せろ』だと。全くアラブ人はこういうのが多い。時計を見たかったら立ってこっちに来いよ、馬鹿者。

さて、この場所が全く分からないが、問題はどうやって帰るか。

タクシーが 3 ディナール(465 円)と言ってくる。そりゃボリすぎだわ。交渉するまでもなく無言で拒絶。

困ってあれこれ聞くと、ヨルダンにはサービスタクシーというのがタクシーとは別にあるらしい。 路線が決まっているが、街の中心部まで行くという。値段は 0.15 ディナール(23 円)。

結局 7-8 キロ離れた場所だったので、超格安だった。

しかし、最初のタクシーと、20倍の開きってはすごい。

# 死海深層水 3 分間クッキング

宿に戻り、死海深層水を使って料理する。

キューリとカブの漬物から。市販されている漬物の素ってのはどのくらいの塩分なんだろう、7% ぐらいかな、などと考えながら、ペットボトルを半分に切った容器に、切った素材を入れ、死海 深層水を原液のまま漬ける。

10分でどのくらいつかるか、と思って取り出してみると、もう既に柔らかい。

そして味は強力にしょっぱ苦い。食えたもんじゃない。

慌ててミネラルウォーターで洗うこと 3 回。それでもやけに苦いので、ミネラルウォーターに 30 分漬ける。塩辛さはだいぶ抜けたが、苦さは素材にたっぷり残ったまま。一度入り込んでしまう と全く容赦ない苦さ。きっと初めから薄めていても、この苦さは残るだろう。

漬物作戦、失敗。

次にトウモロコシ。原液をだいぶ薄めてトライ。漬物と違って、煮りゃー何とかなる、と淡い期待をしていたが、甘いはずのトウモロコシが、別物に変身。しかも変な味。 トウモロコシ作戦、失敗。 次にそら豆(の小さいやつ)。同じ"煮る"でも外壁があれば、苦み成分が通過しない、などと言う、およそ化学者らしからぬ期待をもってして煮てみたが、容赦なく苦みは中へ入っていた。 そら豆作戦、失敗。

ここまで来ると、さすがに苦みに懲りて、雑炊に死海深層水を入れ様などと思わないのが普通だが、死海深層水シリーズだから少し入れてみる。

雑炊にオクラを使うと、見事にその青さ引き立った。とてもおいしそう。

でもやっぱり味は苦かった。

食べているうちにその青さが苦瓜に見えてきて、"ねっとり系ゴーヤー雑炊"の気分。

でも醤油を垂らすと、野菜の甘さと、だしの素のうまみ、死海深層水の苦みが引き立てられて、なかなか立派なゴーヤー雑炊になったりする。

と、書いてみるが、ちょっと無理があるなあ。

雑炊作戦、限りなく成功に近い失敗。

そう言えば、死海の塩は、ナトリウム成分が通常の海の塩よりも少なくて、その分カリウムやマグネシウムや他のミネラルが多いと誰かが言ってたなあ。そしてだからこそ死海の塩は、"美容"にいいんだと。

しかし"料理"には向いていない様である。

つづく